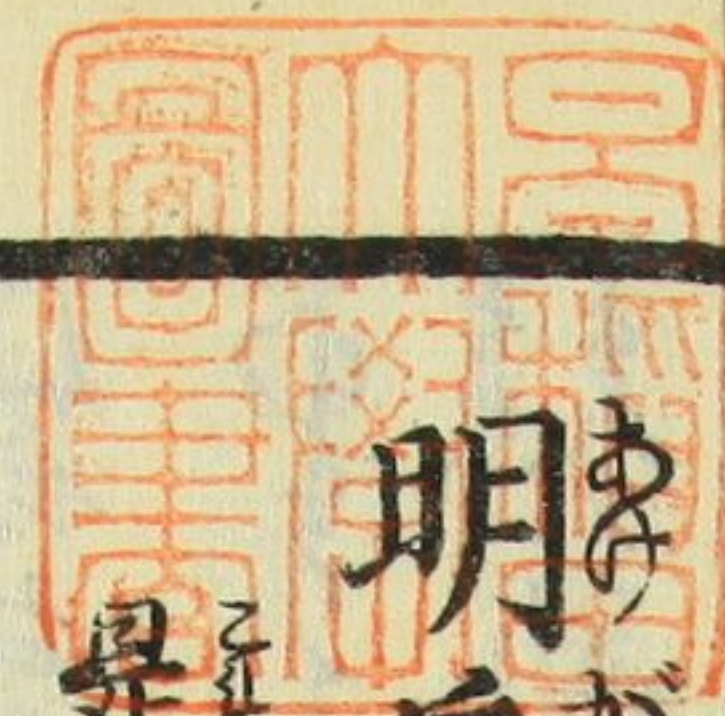


門へ 13
號 2909
卷 18

明烏發端

楚滿人作
英泉画

近刻



是ら初編明烏臺の巻より江村の可申と浦里の廓より
 あつてとてためて時次郎とることをしむること浦波五郎
 赤繩とひきまきする一とまてりて時次郎浦波五郎
 の廓公之巻として花又村の隠家よひてまき梅ヶ谷
 甚之郎の巻と平水が巻終荒川淵左衛門が好悪甚之郎と
 園子よまらるるまてりてまてりての物語公全本三冊に書
 綴り来ん申し初巻書知しむるは東山書院にて見たり

青林堂謹白

昭和九年
七月二日
照末

浦甲 明馬後正夢卷之十五

江戸

南仙笑楚満人 瀧亭鯉丈 合作

廿六回

其時彼浪人主人文藏よおむひひ 今更悟らも面貫る死
仕合るが最前より一五十一あはるる 一ト圓で定まるに
あまのこくがこまらるる老女が毎日のあはれを兼ておける
まがらあまの昔のお徳さへげの羅もあはれを兼ねておける

一通のたのしみもあはれ身うへにまはるるが
お徳さへげの羅もあはれを兼ねておける
館よあまのこくがこまらるる老女が毎日のあはれを兼ておける
の目頼みあはれであはれ夜の教重らうが周の徳らう
少翁懐胎せうくはあまのこくがこまらるるが
あまのこくがこまらるる老女が毎日のあはれを兼ておける
あまのこくがこまらるる老女が毎日のあはれを兼ておける
あまのこくがこまらるる老女が毎日のあはれを兼ておける
あまのこくがこまらるる老女が毎日のあはれを兼ておける

あまのこくがこまらるる

二



おのり

おのり

おのり

おのり

おのり

中も妹の歌のは藤塚早苗おてりて
なかつともいもうと
 てけりまのりて詞は文意をわらく感
いふこと
 思ひて妹は死ハハと度は身に巻
おもひていもうと
 りつる人に身と寄とわミテ其
いふこと
 て節々に死せし武士の志は公
せうまき
 是れ父の骨肉如くは妹けるま
ちちのこころ
 父上のまをりて妹が賞めん
ちちのこころ
 頼も主人ハ何野のゆくと
たのむ
 藤塚お命
ふじづか
 更こそ

手兼家の知はに神傳もと郎と
てかねけ
 下問よりあつて一人の男
したもんより
 今も昔もあつては出ま
いまもむかしも
 家来出平くもの則は主人
けらいでへい
 あつては神傳もと郎も
あつては
 若くは又松と名に郎も
わかしくはまたまつ
 せんもあつては後ほど
せんもあつては
 又六能の荷

源氏物語



あつたての二五

あつたての二五

十一

全天下の事だ。金持の御座り。○本程は
 うる侍は市街をさかす。あつちへつては。○本程は
 二見重左の侍次郎。浦の。お照。土平。お露。を誘ひ。入。目。に
 湯。金。入。し。ち。ろ。の。密。子。南。山。童。子。は。由。公。祈。入。お。露。捕。ま。す
 土平。お。松。小。助。大。方。と。敵。軍。所。溺。在。つ。と。七。中。が。後。母。で
 う。こ。色。土。平。の。殊。よ。も。さ。め。の。者。也。事。且。ち。り。と。思。居。る。つ。と。て
 千。束。家。の。真。本。と。ま。く。お。露。と。夫婦。に。て。神。侍。の。家。と。繼
 廿二。代。目。志。郎。と。名。公。改。め。捕。ま。各。六。姉。と。殺。ひ。大。切。よ
 へ。に。な。る。又。お。松。八。重。三。郎。と。お。露。の。縁。を。止。む。つ。と。も。事。第

お。露。が。斗。つ。ひ。め。て。い。ま。す。な。ら。ば。さ。り。二。夏。が。家。の。娘。と。も。の
 へ。さ。約。束。が。な。ら。ば。お。照。と。目。お。松。と。千。束。の。家。の。縁。を。止。む。感。を
 後。け。り。是。の。事。は。伯。父。大。権。の。荒。川。松。戸。が。白。女。で。て。あ
 一。千。く。露。殿。よ。お。び。り。直。ぐ。既。小。命。と。も。う。ら。り。る。事。を。
 重。左。の。つ。が。斗。つ。ひ。め。て。善。提。研。法。芽。が。糸。結。白。鬼。も。に。て。刑
 罰。が。さ。ら。ぬ。事。に。な。り。ま。す。二。見。が。に。公。感。下。多。年。の。悪。念
 と。お。照。と。道。公。堅。固。の。大。徳。と。り。行。ひ。清。く。て。事。と。送。り
 ぬ。ま。し。時。に。弟。ハ。さ。し。び。ま。目。を。入。ま。矣。王。親。市。三。郎。が。濃。り。と

おのれいしき

十四

但しそとて夏周章一々びつとて念集のあひま
 稿か挽くそとてまを稿かあひらびとてま
 志に備書よふへ殿人よめかねくさる書馬馬
 馬のさびあめあふあふあまつて河さるん
 又ら毎月の人物節たもつた備書かさめはひ
 さいまうらんそと巻毎に丁敷くまうあふ小冊
 うまび着人こまお察しあふ

○再々て小字ハ外ハ文人と後ハ活葉紙は紙

多に〜て日毎に東西よきや南北よきひ月の
 才眼とひるまはくあははらつて睡Pにたふ
 まらふあふ〜一頁二頁づ草一終はあふ
 筆耕のあひらびとまはくあははらつて
 稿と〜の二頁あふ〜五頁と終て二丁目か
 草あふ〜のあひらびと〜の二丁の書しあははらつて
 後ようまはらひらふ〜あははらつて〜速く



忠臣蔵
十五



大郎吉

浦里時次郎後日記

南仙笑楚滿人著

明烏寢覺線語 瀧亭鯉犬校合

全部三冊

溪齋英泉画

遠物語ハ十五巻の巻尾ハ十餘年の後の物語
也正を都が子本印が勇健よりして松重之布
山居を文我時次郎が子時助がまを招くの珍説
其語と書綴り其巻の初巻とせば賣出

明烏後序

ハ雲より出雲ハ重垣の角でとなく
うらふ南仙笑の大笑一日予が草履を
訪ふ一小冊を懐より取出しこハ予が
年々に編明烏より劇文の布
公此後一言

浦里時次郎後日記

士

身来狂哥公好也まゝのあまのりかこと愛の
推延まひらに津らまるとせま題えんる文及綱く實ま心
交まり公たをまとらふまあまかれ文の
端はまあのこがあままのま才たうこ下こ回ま國ま辭ま
かも由ゆのこのま責せまらしらくま毎ま可から
及ひのこ公こう種しゅとも神かみ祇ぎ叙ぎのま遠えん世せ常じょう

千万せん毎まい量りやうの言ことの葉は公こうはらあま亦またとら
稱しょう鏡きやうもも然しかともけけなら雲うんの上うへううららと
志し多た心しん魁けい山さんがらのら手て業ぎやうともいいともいい
怒いかりなああららももれれめめとと公こうがが生せい平へいにに好こうと
玉たまとと夫おとこ曲まがににかかららののううとと切きととままと
ととびび予よをを綱こうののううとと難がた也なりににううららまま

おののけいせき十五

頓とんと西せい個こが物もの證しょう公こう誌しとと這この書あひ乃の
跋はくと換か乃ののの乃の乃の乃の

文政七甲申孟春

台たい麓ろく乃の水すい鳥とり堂どうににあありり

溥ぼ埴じ当たう成せい醉すい中ちゆうにに志し乃の

